

風の便り(第70号)

発行日：平成17年10月

発行者：「風の便り」編集委員会

連作障害と年功障害

島根県江津の宿で季節は突然冬に変わった。泊めていただいた部屋には明かり取りと排煙を兼ねた天窓が二つあって、冷たい雨が天井のガラスを叩き、一晩中「もがり笛」のようなヒューヒューと身を竦ませる風の音が続いた。翌朝、車窓に見た日

本海は白波が泡を吹いて、岩を叩き、海は大荒れであった。前夜は関係者が沢山集まって下さり、ひたすら島根の方々と語りあった。その余韻の中でメモをとったものが以下の感想である。



1 「連続」の危機、「成功経験」の危険



島根に限った事ではないが、このところ情報交換や懇親の会によく出席させていただく。その結果、沢山の方々と語り合う機会に恵まれた。新しい時代の要求を分っている多くの人に会ったが、同じように多くの分っていない人にもお会いした。気付いたことは、おおまかに2種類の人がいるということである。第1は、時代の変化に対応し、従来の発想を修正しつつある人である。第2は、自分の意見はすでに決まってけして変えようしない人である。この方々の論理は変化する時代が悪いと言わんばかりであった。事は、男女共同参画から生涯学習まで、施策の上では、「子育て支援」から「学校開放」までことごとく意見が対立する。

第1種の方々は、時代の変化は人々の要求の結果であることを自覚しておられる。したがって、マイナスもあれば、プラスもあることを自覚しておられる。第2種の方々は、変化の基本原理がお分かりではない。それゆえ、変化がもたらした成果の恩恵には浴しているのに、そのマイナス面ばかりを論難される。成果を当然として享受しながら「副作用」は時代が悪いと言う。このような姿勢からはマイナスに対する対処策は出て来ない。

目次

- | | |
|----------------------|----------------------------------|
| 1. 連作障害と年功生涯・・・P1 | 4. Message To and From・・・P12 |
| 2. 英訳「俳句いろはカルタ」・・・P4 | 5. 第61回生涯学習フォーラムお知らせ・・・P13 |
| 3. 矢野大和落語に学ぶ・・・P9 | 6. 編集後記:「風の便り」2006年号登録について・・・P14 |

これらの方々は変化を求めている人々の立場に立つことが出来ない。変化は心外であり、これまでの自分の生き方の変更を迫る。「生き方」は変えたくないのである。したがって、男女共同参画も、子育て支援も、分らないのではない。分ろうとせず、分りたくないのである。マーシアが定義した「自分自身観」(identity)の「事前閉鎖」(Foreclosed)が起るのであろう(註)。これらの方々の「答」は、社会的条件が変わろうと、科学技術が進化しようと、決してご自分を変えようとはしない。答はすでに事前に決まっている(foreclosed)のである。時代が悪く、変

化を歓迎しないという事は、いままで通りの発想が減んで行くことを哀しみ、変わって行くことへの反発と思い込みが激しく、頑固である。しかも、「事前閉鎖」型は役職の上の方の人々に多い。ご自分の発言に対して、若い部下達が耳を塞いでいる現実が見えていない。

(註) J.E.Marcia, Development and Validation of Ego-Identity Status, Journal of Personality and Social Psychology, 1966, pp.551-558

❀ 2 「「養育」の社会化は認めないー子育ては家庭がしろ！」 ❀

筆者は2年前に男女共同参画を言う以上、「家庭にすべての子育て責任を課すこと」は間違っている、と宣言した。したがって、それまで自分が唱えていた「家庭教育責任論」から転向した。代わりに「養育の社会化」論を展開するようになった。子育て支援は社会の責任で行なうべきであるという考え方に転換した。その論理はフォーラム論文「養育の社会化」に詳しく記したので省略するが、結論は以下の通りである。

少子化の防止を言い、男女の共同参画を主張し、女性の能力を社会に引き出すことが大事であると言うのであれば、子育ての責任を「家庭」から「社会」に移すのは当然である。家事と育児のほとんどを女性に背負わせて、なおかつ「少子化」は止めなければならない、というのであれば、そうした役割のせめて半分は男が分担しなければならない。男が責任と役割の分担に応じないというのであれば、養育機能は社会が引き受けるべきであろう。子育て支援論はそこから出発する。

かくして、男女共同参画と「子育て支援」は裏表であり、「少子化」の防止と「養育の社会化」もまた表裏一体である。なぜなら、Super Woman でも両

方を同時にかつ立派にこなすことは至難のわざだからである。

しかし、多くの偉い男達は未だに「家庭の育児責任論」者であり、「家庭でのしつけや教育の責任論」を言い続ける。育児も家庭教育もしよわされているのは女性である。したがって、「家庭責任論」は「女性責任論」に等しい。「家庭はもっとしっかりしろ！」と言うことは「女性はもっとしっかりしろ」と言うことに等しい。この種の方々は「養育の社会化」論はもとより、家事の分業も、女性の社会進出も、女性の自己実現も、様々な家庭の有り様についても、人の話を聞こうとはしない。

講演前のお茶の時間にそういう話を聞いたので、ついつい講演のトーンが高くなった。女性に「育児をちゃんとやれ」と言うのなら一度「男が引き受けてやってみたらどうか!」、「子どものしつけが悪いと言うのであれば、試しに男が自分でやってから言え!」、「やったことのないものに発言権はない!」と声を張り上げた。前号に特筆した「豊津寺子屋」事業の総括は「養育の社会化」論から出発している。



3 連作障害と年功障害



10月の生涯学習フォーラムに山口県田布施町の「田布施雑学大学」の発表があった。事例を発表して下さった三瓶晴美さんが真に言いたかったことは社会教育プログラムの「連作障害」であると当日の夕食会の席でうかがった。土を変え、新しい作物に転換しなければ豊かな実りをもたらすことは出来なくなる。生涯学習では新鮮味が失われ、進化が止まって「マンネリ化」が起る。同じ作物を作り続けると土がダメになって「連作障害」が起ることは農業の常識である。しかし、明らかに生涯学習や子育て支援の常識にはなっていない。相変わらず学童保育のやり方も社会教育のプログラムも数十年前と同じ型を踏襲している。公民館などは「連作障害」の典型であろう。

三瓶さんの指摘を聞きながら、私は「連作障害」の背景には、これらのシステムを支配している「偉いさん」方に「年功」障害とでも呼ぶべき「過去の体験」、特に「成功体験」への「固執」が顕著であると思う。

草創期の「田布施雑学大学」が新鮮で、魅力的で、人々の評価を得て成功したように、多くの経験者、功労者は過去の事業やプログラムに成功している。そうした成功体験が学習結果の「転移」や応用を阻み、従来の経験の「干渉」が新しい発想への転換を阻むのである。アメリカの心理学者ペックはこうした現象を「精神の固定化」(Mental Rigidity)と呼んだ。

それゆえ、成功体験者は、自らに成功をもたらした方法や内容に自信をもち、こだわっている。これらの人々の最大の落とし穴は時代や人々の変化の

要素を見逃すことである。「筋肉文化」が世間を支配していた時代には、「筋肉」の働きに優れた男が「稼ぎ」に出た。女性は家庭にという「性役割分業」は歴然たるものであった。この時代に「子育ては家庭が責任をもってやれ」と言うことはフェアではなかったが、大きな矛盾にはならなかった。男の偉い役職者はこの時代の空気を吸ったのであり、この時代の「良妻賢母」の理想を聞いて育ったのであろう。そうした家庭やそうした家庭を守った理想の母が彼らの今日を築いたとしてもなんら不思議はない。彼らに少子化の発生メカニズムが分らないのは当然であろう。男女共同参画が不快であるのも当然であろう。まして「養育の社会化」を分って下さい、と言うことの方が無理というものである。”地域の子どもはみんなで育てよう”というスローガンの大会においてすら、「子育て支援」よりは「家庭が子育てに責任を持つ」ことの方がもっと大事ではないのか？という論理になる。

文部科学省が一方で社会による子育て支援の発想に基づいて「子どもの居場所」事業を拡大発展させようとしながら、他方では、陳腐な家庭教育推進事業に巨大なお金を使っているのは、政策決定者やその取り巻きの中に上記の「年功」障害者がいるからである。見聞の限り、現行の「家庭教育推進」事業に「来るべき人」は来ない。「来なくてもいい人」だけが集まって、子どもの「生きる力」をダメにする教育講演を聞いている。何たる無駄と徒勞であることか？



4 同じことをやり続けた結果



「連作障害」は同じことをやり続けた結果に起る。土の劣化、作物自体の成長力の低下を見逃すか

らである。現在の子どもを見れば、学校教育の誤りは歴然たるものであろう。それは「家庭の責任」に

起因するものだけではない。学校の指導力低下に起因するものの方が多い。学校は「児童中心主義」を連作している。相も変わらず「子どもの主体性」をいう。今では「子どもの人権」が教育界を席卷し、子宝の風土では子どもの権利は保障されなかったかのように言う人さえいる。

教育に限ったことではないが、一生懸命にやっても成果が出ないことがある。「継続は力」を信じて、さらに続けても、どうしても成果がでない時がある。一生懸命にやってみて、しかも結果が出ない時は、「中身と方法」が間違っていないか、と疑ってみるべきであろう。疑う能力を失うことが「年功」障害で

あり、自分自身観の「事前閉鎖」である。この時、人は、昔やったようにしかやれず、昔考えたようにしか考えられなくなる。これでは到底「変化の時代」には対応できない。失敗の分析も出来ず、自分達以外のものに責任があるかのように考えることになる。年をとった教育長にも、社会教育委員にも、公民館長にも似たような「連作障害」者が多く、「年功」障害者が多い。日々変化し続ける子どもを指導している校長にすら多い。とても学校教育を革新したり、新しい時代の生涯学習を創造する状況にはない。



英訳「俳句いろはカルタ」

水原秋桜子監修、三浦ダイアン、三浦清一郎共訳



「豊津寺子屋」の子ども達は宿題を終え、自習に飽きると「有志指導者」の先生方を交えて、様々な遊びを遊ぶ。低学年が集まってくる時間は未だ上級生が授業を続けているので学校内を駆け回る分けには行かない。したがって、自ずと静かな室内遊びに限定される。現在工夫をしているのは、「将棋」であり、「囲碁」であり、紙芝居や読み聞かせであり、「トランプ」であり、お手玉やおはじきや剣玉やビー玉などを使った「昔遊び」であり、百人一首、論語カルタ、そしてこの「俳句いろはカルタ」である。中でも俳句は、俳人の松清トモ子先生がいらっしゃるので正規のプログラムにも取り入れている。その関係で子ども達は俳句と言う伝統的な文学の形式にすでに慣れている。自分で作ったこともある。もちろん、カルタも大人気で、すべての子どもが遊びの中ですべての名句を暗唱してしまっている。カルタチャンピオン大会は子ども達の熱狂で毎回熱くなる。

折から文部科学省は小学校へ英語を導入することを決定した。豊津も英語には熱心である。「雨にも負けず」の英訳も入手した。子ども達の反応を見ながら簡単な物から導入してみようということになった。そこでカルタの英訳の試みである。無謀にも恐れ多い俳句名人達の名句を清一郎が翻訳し、ダイアンが英語らしい英語に修正した。モデルはサイデンステッカー先生の芭蕉の名訳『夏草やつわものどもの夢の後』である。先生の訳は“ Oh ! summer grass, trace of soldiers' dream.”である。主語もない、述語もない。これで良いのだ、と合点した後は楽であった。翻訳が出来上がった後は二人の合議で韻を踏むことが出来ないか、言葉を重ねて詩的なリズムカルな表現は可能か、などと苦心した。読者の皆さんがご覧になって、訳の上で修正・追加すべきことなどお気づきのことがありましたらお教えいただければまことに幸いです。

い

いくたびも雪の深さをたずねけり

(正岡子規:まさおか しき)

Again and again
I ask how deep
the falling snow is.

ろ

六月や峰に雲置くあらし山

(松尾芭蕉:まつお ばしょう)

On top
Mt. Arashiyama carries a speck of
cloud under the June sky.

は

春の海ひねもすのたりのたりかな

(与謝蕪村:よさ ぶそん)

Spring ocean
swaying gently
all day long.

に

日本がここに集まる初詣

(山口誓子:やまぐち せいし)

All Japan
gathers here
for New Year's Day worship.

ほ

ほろほろと山吹ちるか滝の音

(松尾芭蕉:まつお ばしょう)

Sound of falls
make the petals of yellowrose
dance down one by one.

へ

へなへなに腰の抜けたる団扇かな

(久保田万太郎:くぼた まんたろう)

At long last
the spine of the fan
wore out.

と

遠山に日の当たりたる枯野かな

(高浜虚子:たかはま きよし)

Beyond the dreary field
the sun shines on the mountain
in the faraway distance.

ち

チチポポと鼓打とうよ花月夜

(松本たかし:まつもと たかし)

Cherries in full bloom
on a moonlit night
we beat drums happily.

り

りんどうのかくれ顔なる細みかな

(松瀬青々:まつせ せいせい)

Autumn bellflower
shyly blooming,
behind a thin silhouette.

ぬ

ぬれ縁に母思う日ぞ今年竹

(石田波郷:いしだ はきょう)

Sitting on the open verandah,
facing new bamboos,
how much I miss my late mother.

る

瑠璃沼に滝落ち来たり瑠璃となる

(水原秋桜子:みずはら しゅうおうし)

Water becomes emerald,
when the falls stream
into Emerald Marsh.

お

隠岐やいま木の芽をかこむ怒濤かな

(加藤楸邨:かとう しゅうそん)

On Okinoshima Island
raging waves surround
sprouting tree buds.

わ

わが^{こと}事とどじょうの逃^ねげし^{ぜり}根^ね芹^{ぜり}かな

(内藤丈草:ないとう じょうそう)

I didn't chase you,
you thought I did,
the mudfish hides beyond the parsley.

か

柿^ほく^りえ^ば鐘^ねが^う鳴^りる^{なり}法^ほ隆^{りゅう}寺^じ

(正岡子規:まさおか しき)

Tasting persimmons
hearing the sound in the distance
the bell of Horyuji.

よ

よろこべばしきりに落^おつる^る木^きの^の実^みかな

(富安風声:とみやす ふうせい)

Feeling happy
oak trees shower me
with acorns.

た

たか^かね^ねほし^ほこ^こが^がい^い
高^{たか}嶺^ね星^{ほし}蚕^こ飼^がの^い村^{むら}は^は寝^ねし^しづ^づまり

(水原秋桜子:みずはら しゅうおうし)

Towering stars
over
the sleeping, silkworm village.

れ

れん^{れん}ぎ^ぎょう^{ょう} ひ^ひと^とえ^えだ^だ
連^{れん}翹^{ぎょう}の^の一^{いっ}枝^しづ^づつ^つの^の花^{はな}ざ^ざかり

(星野立子:ほしの たつこ)

Forsythia
rod by rod
a burst of blossoms.

そ

空^{そら}を行^いく^くひ^ひと^とか^かた^たま^まりの^の花^{はな}吹^ふき^き雪^{ゆき}

(高野素十:たかの そじゅう)

A blizzard of cherry petals
flies away
into the sky.

つ

つゆ^{つゆ}ち^ち ち^ちょう^{ょう}ちん^{ちん}
露^{つゆ}散^ちる^るや^や提^ち灯^{とう}の^の字^じの^のこ^こん^んばん^{ばん}は

(川端茅舎:かわばた ぼうしゃ)

Dew descending
night falling
the letters "Good Evening" clear on the lantern.

ね

ね^ねぎ^ぎ坊^{ぼう}主^ず雨^{あめ}ふ^ふれ^れば^ばま^また^た寒^{さむ}くなる

(大野林火:おおの りんか)

With each shower,
on heads of green onions,
it grows colder.

な

菜^なの^の花^{はな}や^や月^{つき}は^は東^{あづま}に^に日^ひは^は西^{にし}に

(与謝蕪村:よさ ぶそん)

The sun is in the west
the moon is in the east
kanola blossoms in the middle.

ら

らん^{らん}らん^{らん}
爛^{らん}々と^と昼^{ひる}の^の星^{ほし}見^みえ^えきの^のこ^こ生^{せい}え

(高浜虚子:たかはま きよし)

The stars shine bright
even in the daytime
here where mushrooms sprout.

む

麦^{むぎ}刈^りて^て近^お江^{うみ}の^の湖^{うみ}の^の碧^{あお}さ^さかな

(石井露月:いしい ろげつ)

After harvesting the wheat
such a brilliant blue
the lake of Oumi.

う

う^うめ^めい^いち^ちりん^{りん}
梅^{うめ}一^{いっ}輪^{りん}一^{いっ}り^{りん}ん^んほ^ほどの^のあ^あた^たた^たか^かさ

(服部嵐雪:はっとり らんせつ)

The plum tree blooms
with each new bloom
it's becoming warmer.

あ

いまちづきふよう
居待月芙蓉はすでに眠りけり

(安住 敦:あずみ あつし)

Under the moon
of the 18th night
the rosemarrow soundly sleeps.

の

のがすみ こさめ
野霞のこぼす小雨やよもぎ摘み

(芝不器男:しば ふきお)

Picking sagebrush
in the spring mist
it sometimes changes into a drizzle.

を

折りとりてはらりとおもき 芒かな

(飯田蛇笏:いいだ だこつ)

Feather light dance,
as stem snaps
pampas grass.

く

くりひろ
栗拾いねんねんころり言いながら

(小林一茶:こばやし いっさ)

Gathering chestnuts,
I sing a lullaby
for the baby on my back.

や

やぐるま あさかせ のほり
矢車に朝風強き幟かな

(内藤鳴雪:ないとう めいせつ)

Morning gust
on the arrow wheel,
carp streamers lively.

ま

まんじゆしゃ げ だ
曼珠沙華抱くほどとれど母恋し

(中村汀女:なかむら ていじよ)

Manjusaka ,
the more you fill my arms,
the more I miss my mom.

け

けしの花十日経ちけり散りにけり

(加舎白雄:かや しらお)

The poppy blooms,
in just ten days
it's gone.

ふ

ふる雪や明治は遠くなりけり

(中村草田男:なかむら くさたお)

Falling snow
long ago
Meiji slipped into the past.

こ

この道の富士(ふじ)になりゆく 芒かな

(河東碧梧桐:かわひがし へきごとう)

This path
lined with pampas grass,
leads to Mt. Fuji.

え

えんてん ほ
炎天の 遠き帆やわがころの帆

(山口誓子:やまぐち せいし)

Under blazing sun
see the sail in the distance
see the sail in my heart.

て

てはなび
手花火のこぼす火の色水の色

(後藤夜半:ごとう やはん)

Fireworks in hand
falling colorful sparks
reflecting on the water.

あ

朝顔につるべとられてもらい水

(千代女:ちよじよ)

Ask for water from the neighbor
Morning glory
climbing up the well-bucket.

さ

さみだれのあまだればかりうきみどう浮御堂

(阿波野青畝:あわの せいほ)

Early summer rain
floating shrine standing
in the raindrops.

き

きしきと牡丹ぼたんつぼみをゆるめつつ

(山口青邨:やまぐち せいそん)

The peony
opens its bud
slowly and purposefully.

ゆ

雪の朝に二の字にのじ(にのじ)二の字げたの下駄あと

(田 捨女:でん すてじょ)

In the morning snow
show the trace of the letter two
of wooden clogs.

め

目には青葉あおば山ほととぎすはつ初がつを

(山口素堂:やまぐち そどう)

Fresh green everywhere
mountain cuckoo warbles
first bonitos comes to market.

み

水打みずうって氷こおる戸口とぐちや今朝けさの春はる

(村上鬼城:むらかみ きじょう)

New Year's morning
purifying water
frozen around the entrance way.

し

しずかさや岩いわにしみ入せみる蝉せみの声

(松尾芭蕉:まつお ばしょう)

Tranquility of mountains
the deafening song of the cicada
penetrates the rocks.

ゑ

越後屋えちごやにきぬさく音こるもがや衣替え

(榎本其角:えのもと きかく)

Seasonal change of garments
sound of cutting cloth
echoes in Echigoya shop.

ひ

雛ひなの灯ひを今宵こよいの客きやくにともしけり

(高浜年尾:たかはま としお)

Doll Festival
Lit candles of lanterns
for the guest tonight.

も

百舌鳥もずなくや入り日いさしこむ女めまつばら松原

(野沢凡兆:のざわ ぼんちょう)

Shriek shrieks
setting sunlight shines
into the pine cove.

せ

青天せいてんや白こき五弁べんの梨の花

(原 石鼎:はら せきてい)

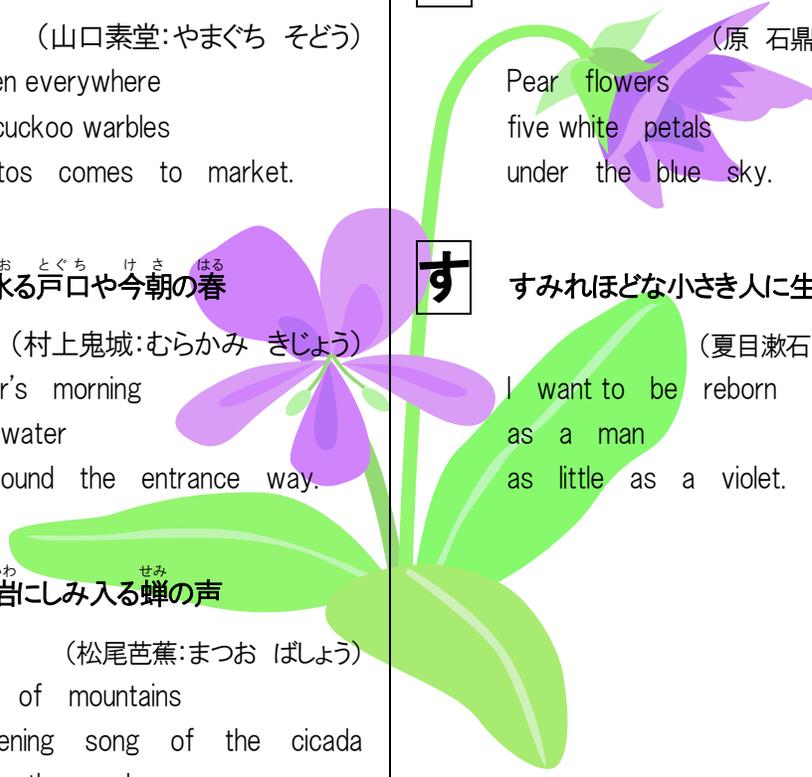
Pear flowers
five white petals
under the blue sky.

す

すみれほどな小こさき人ひとに生まれなたし

(夏目漱石:なつめそうせき)

I want to be reborn
as a man
as little as a violet.



矢野大和落語に学ぶ



1 情に始まり情に終わる



筆者は中坊公平さんがおっしゃったという「正面の理、側面の情、背面の恐怖」を信奉している。講演はこのスタイルに倣って構成する。研究者を名乗る以上、あくまでも論理が主役である。もちろん、聞いていただくためには「側面の情」にも訴える。聴衆を「背面の恐怖」で脅すことはないが、時代錯誤の発想に対しては、時に口調は激しくなりがちである。

講演以外の現場でも、引き受けた小学校の「生きる力」の指導や「豊津寺子屋」の子ども達の指導

原理はまさにこの方式を採用している。先生方には、活動の「理」を説明し、応援の情を惜しまず、それでも逸脱する者には「鬼の塾長」の恐怖を持って対処する。

ところが先日お聞きした矢野大和落語は人権を論じても、生涯学習を論じても情から入り、情を持って終わる。聴衆に自分で考えさせる点で抜群であった。矢野落語の真髄は、いわば、正面の情、側面も情、背面の論理である。勿論、「恐怖」はどこにもない。



2 話法に倣う



筆者は研究の命は論理であると信じて疑わない。結果的に筆者の講演の論調は理詰めになる。理詰めとは、資料に基づく事実と正確な現状分析を突き合わせて、その解釈の論理を積み上げて行くのである。論理的に目的に適っていない中身や方法は証拠を上げて完膚なきまでに批判する。しかし、理詰めの講演は多くの方々の反発を買う。巻頭に書いた「連作障害」や「年功障害」の人々は、私がシステムや思想を批判しても、ご自分が侮辱されたと勘違いする。そこで矢野大和落語の話法を借用する実験を始めた。原理は「情」から入ることである。

彼の落語に「肯定から入る」という落し話がある。

矢野さんはお客さんに三つのお願いをする。「大分弁で喋ります」、「隣の人と話をしないでください」、「そんな考え方もあるんだな、と思って聞いて下さい」の三つである。この三番目が「肯定から入る」である。矢野さんには「肯定から入る導入」のやり方にいろいろ具体例なネタがあるのだが、私は最も簡単なものをお借りして実験してみた。

筆者の論調は理詰めの上に、不幸にして現行の学校教育の指導法や子育て支援のプログラムに正面から対立するところがある。結果的に、人の耳には厳しく聞こえる。怒らせてしまっただけでは何のための講演か意味を失う。そこで矢野話法である。

「いいか、人の意見を聞く時には『そういう考えもあるな。そういった考えもありますね。』といって聞け！」と息子に言ったという。

すると息子が「そういう聞き方を肯定から入る、って言うんだわ」

息子の方が頭がいい。

「いやそれは出来ん。無理じゃ。だめですね、という聞き方を何と言う？」

「もちろんそれは否定から入る」

「よくそんな難しい言葉知ってるな」

「だって学校に行きよる」

「学校に行ったらどうしてそんな言葉がわかるんか」

「だってぼくたち、学校に行く時はいつも校庭から入

るもん」

この時、笑った聴衆はすでに「敵意」を武装解除されている。話を肯定的に聞いてみようと言う構えも出来ている。現行理論に挑戦的な自分の講演には打ってつけであると判断して、恐る恐る試しにやってみた。みんながどっと笑ってくれた。初めにやっておくと、講演の途中でも、ここのところは一度「肯定的に聞いてみて下さい」と投げかけることも出来た。その結果、多くの人が、過激に聞こえるであろう教育論をにこやかに聞いてくれた。味を占めて二度、三度と試してみた。いまだ失敗していない。矢野大和落語の凄さを身を持って体験したのである。

❀ 3 『態度は信頼の関数である』



差別論や「セクハラ」論を皆さんに聞いてもらうことは難しい。論理は簡単な筋立てでも問題は論理では解決しない。わかる人はわかるがわからうとしない人は決してわからうとはしない。価値論がこじれるとわからない人には許してもらえない。社会学では「神々の戦い」と呼んでいる。さしずめ、イスラム原理主義のテロなどはその典型である。

矢野大和落語はこのような問題でも「情」から入る。情から入るとは、情景描写から入ることに重なる。例えば、落語の会場に大分県知事が来たとする。矢野氏は深々と頭をさげて「知事、初めてお目にかかります。矢野と申します」と言う。逆に親戚のおばあちゃんが来たとする。矢野氏は頭は下げずに手を振るだけだと言う。

「おばあちゃん久しいな。元気よかった？」

見てる人がきつと、差別だなと言い張って、「どちらの方にも丁寧に丁寧に頭をさげた方が、より人間として立派じゃないですか」

「この理屈は当たっています。(肯定から入る!)。より丁寧に頭をさげた方が立派です。(肯定から入

っても矢野落語は主張を変えない。)

でも私は差別などしているつもりはありません。時と場合によって、態度を変えています。私と知事との信頼関係の深さと、おばあちゃんと私の信頼関係の深さが違うのです。このように立ち場が違う時に同じようにしたらかえって失礼になります。知事と私とは友だち関係ではありません。でも私は大分県知事を尊敬しています。みんなから選ばれています。当然頭を下げると思います。逆におばあちゃんと私は親しい間柄で、信頼関係があります。深いです。小さい時おむつも変えてもらいました。すべて見られています。そんなおばあちゃんに深々と頭を下げると、「なにしてるんだ、他人行儀だ」と言われます。これをみんな同じようにして差別をなくそうと言っている人もいるような気がしてなりません。」

矢野落語の論理は情の陰に隠れている。人間の行動やその評価基準を画一化するなどは決して言わない。表題のように表現は TPO で変わり、態度は信頼の関数であるとも言わない。聞いている

人はニコニコ笑っておばあちゃんに手を振っている矢野さんを思い描いて納得しているのであろう。彼が1年に400回も各地に呼ばれる理由がここに潜んでいる。誰も不愉快にならない。誰も怒らせない。みんなをほのぼのとさせて、しかも、伝えるべきことは伝えている。

彼のセクハラ論も情景から入る。

「信頼関係があって男が女の人を触るのは悪くないよな。女の人も大好きなひとからはさわりたいやろ？」

ところが男の方に女性との信頼関係を見抜く力がないから問題が多発している。信頼関係を見抜く力こそ「生きる力」である、とのたまう。

口演の後、若い女の子がきて「おいちゃん、今日

のセクハラ分りやすかった」と言ってくれました。「そうか」。「大好きな人から触られたら嬉しいけど、大嫌いな人から触られたら訴えてやろうと思うわあ。信頼関係によってセクハラか、セクハラじゃないか、決まると思うわ」と若い子に言わせている。その後が人々の共感を呼ぶ。若い子は矢野さんに追い討ちを掛けた。「だいたいおじちゃん、男の人がな、40を越えて女性に好かれていると思うことが基本的にまちがいや！」「男は40を越えたら嫌われているという謙虚さがあつた方がいいよ」

矢野氏はすでに49才である。「生きる力は時と場合によって態度を変えなくちゃ」というのが笑わせた後の矢野理論である。

4 ふるさと主義— 日常主義



矢野落語に登場するのはその多くがふるさとの人々であり、その方々の日常である。落語の素材は誰にもあるふるさとであり、誰もが共有する日常である。専門用語も、横文字も全く出て来ない。嫁姑の関係を論じ、生涯スポーツと重ね、ふるさとの年寄りと小学生の交流を論じて、高齢者の社会的活躍の場の必要を説き、高齢者を社会的に承認することの重要性を説く。小学生と三人の高齢者の交流を描写した「たかくんの通学路」は、今や第1級の生涯学習論となった。

次の小話も自在に活用が可能である。

おばあちゃんがスイミングスクールで泳ぎを習いはじめる。年寄りの健康増進につなげれば、言わずと知れた生涯スポーツ論になる。自立を論じれば生涯現役論である。嫁と姑の物指しが違うという生活基準の問題として取り上げれば世代論になる。もちろん、そうした固いテーマにつなげなくても会場はどっと湧くだろう。

79才になったおばあちゃんが今年水泳を始めました。

「婆ちゃん、79才にもなってなんで水泳を始めたんですか」

「もうボチボチしたら、わたしお迎えが来るから。もし私が死んだら、三途の川を自分の力で泳いで渡ろうとおもって、水泳を始めた」

生涯現役ですから、ばあちゃん、いい趣味を持ちました。先生の教え方がうまかったのでしょうか。どんどん、どんどん泳げるようになりました。

奥さんが心配して「先生、うちのおばあちゃん、水泳どうですか？」

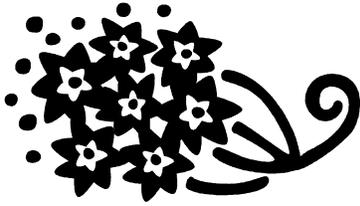
「奥さん、びっくりしました。おばあちゃん、水泳上手ですよ。もし、今お亡くなりになっても、三途の川を自分の力で泳ぎ渡ってもなお、ピンピンしていますよ。」

「そうですか。そこまでしていただいてありがとうございます。でも、先生にお願いがあります。」

「なんですか、奥さん」

「おばあちゃんにターンだけは教えないで下さい」

* (参照) 矢野大和、笑って元気、家の光協会、2005年



MESSAGE TO AND FROM

メッセージをありがとうございました。今回もまたいつものように編集者の思いが広がるままに、お便りの御紹介と御返事を兼ねた通信に致しました。みなさまの意に添わないところがありましたらどうぞ御寛容にお許し下さい。

★山口県長門市 青木厚治、西本達夫 様

お屋をごちそうさまでした。岩崎さんに資料を送りました。地域の緊急課題は高齢者と女性と子どもの支援です。生涯学習推進計画も当然この3者を巡って立案するべきであると思います。これまで成人や”社会教育ファンクラブ”のために進めてきた「趣味・教養・実益・軽スポーツ」などの生涯学習サービスプログラムは思いきって全部捨て去るべきです。従来の行政依存を脱却するためには、学習者もプログラムも緊急課題以外は自立させるべきだからです。

生涯学習の政策課題は福祉や医療の分野と重なります。当面の目標は「少子化の防止」、「医療費と介護費の削減」、そして「女性の就労支援」です。言い換えれば、社会が「養育を引き受け」、「年寄りの元気になる舞台を創造し」、「女性の働く時間に合わせて子育て支援プログラムを実施する」ことです。そうなると教育分野だけで必要な支援ができるはずはありません。基本計画ができましたらメールで結構ですからお送り下さい。どの部分で児童福祉と組むのか、何を健康福祉課と連携するのか、男女共同参画と子育て支援はどのように融合させるのか、私案の試案をお送ります。

★大分県佐伯市 矢野大和 様

あなたの落語を真似させてもらっています。大変効果的でありがたいことです。一文を書いて矢野落語の分析をしてみました。いかがだったでしょうか？

★島根県松江市 澤 アツ子 様

江津の大会は一気に冬を感じさせた晩でしたが、いささか話したりなかったですね。神門先生に資料を送りました。ようやく研究成果と実践を繋ぐ構想を分っていただける行政責任者にお目にかかった思いです。県の行政は担当範囲が広いからおいそれと他部局との連携を実現することは難しいでしょうが、県下一つの町でも実現してみてください。「学・福」の共同は、文部科学省は、たとえ理解しても実行せず、厚生労働省は、恐らく考えたこともなく、「連携」も「協働」も中央では出来ないでしょう。ご期待申し上げます。頑張ってください。

★鳥取県大山町 山田 晋 様

鳥取大会でお聞きした教育長のお考えに興味しております。何なりと加勢しますので、手伝わしてください。生涯学習課が「福祉」と協議して保育を前提とした「児童教育」を確立できれば、初めて「保育と教育」を融合させた「保教育」が行政のシステ

ムとして実現します。保護者が必要としているのは「安全」と「健全な発達」の両方です。特に、就労中の母親が必要としているのは労働時間に合わせた「保教育」です。先生の挑戦に敬意を表します。経過を教えてください。楽しみです。

★ 島根県浜田市 岡橋知左子 様

素敵なカードをありがとうございました。少しはお役にたてて何よりです。次回はどうぞご遠慮なく声をおかけ下さい。いただいた絵のように我が家の柿も秋の陽に照り輝いて丁度食べごろになりました。原稿に疲れると時々庭に出ます。金木犀の香る中

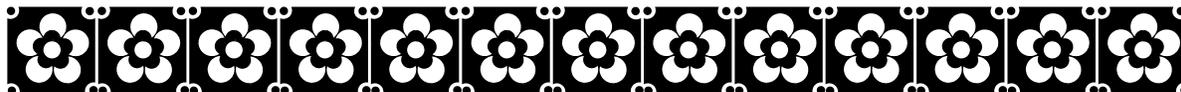
で、熟し柿を直接木からもいで食べる贅沢は田舎ぐらしの特権ですね。



過分の郵送料をありがとうございました。

「風の便り」は1年契約です。今月から2006年の購読申込みを受け付けます。

大分県日田市 石井良文 様



お知らせ 第61回生涯学習フォーラム

日時：平成17年11月19日(土)15時～17時、
のち「センターレストラン『そよかぜ』にて夕食会

場所：福岡県立社会教育総合センター

事例発表：“夢追い人”事業（山口県東岐波 赤川 和恵氏）

論文発表：教育投資論再考；子育て支援の経済学（発表者：三浦清一郎）

フォーラム終了後センターレストランにて「夕食会」を企画しています。ふるってご参加下さい。準備の関係上、事前参加申込みをお願い致します。（担当：恵良）092-947-3511まで。



編集後記： 「風の便り」2006年号の登録について(第1回)

***** 一万一の場合には一 *****

11月になりました。早いものでまた1年が巡りました。「風の便り」も70号を迎えました。1年区切りの購読更新の季節になりました。

「風の便り」も来年は7年目のサイクルに入ります。この一年、陰に日向に様々なご支援本当にありがとうございました。書き綴った事の中から論文が生まれたり、新しい講演の論理が生まれたりしました。来年2月には学文社の快諾を得て『子育て支援の方法と少年教育の原点』のタイトルで久々の出版を果たします。また、仲間と続けてきた「中国・四国・九州地区生涯学習実践研究会」は第25回の節目の年を迎えます。その25周年を記念した「市民の社会参画と地域活性化戦略」の出版準備も整い、5月の大会までには発行できることになりました。

来年も多くの方々のご支援のおかげで、「便り」の購読料は無料で続ける事ができます。引き続き購読をご希望の方は2006年分の郵送料または90円切手12枚を同封の上事務局までお送り下さい。この度もメッセージカードを同封しますので、送付先の変更、ご意見、感想などご自由にお寄せ下さい。ご承知とは存じますが、アメリカの藤本 徹さんのお力添えで定例の生涯学習フォーラム「参加論文」と「風の便り」を共にオンライン化しております。末尾にホームページのアドレスも記してあります。併せて御利用下さい。

追伸

生涯学習、生涯スポーツのお陰で現在の私は心身共に快調であります。しかしながら、過日、敬老の日に、思いがけぬ「紅白まんじゅう」も届き、来年は、筆者もいよいよ高齢者の年齢に足を踏み入れます。「風の便り」は小生の気力・体力の続く限り、勉強を続け、執筆を続ける覚悟ですが、如何せん「老い」はなん人もとどめる事の出来ぬ「衰弱と死に向かつての降下」に他なりません。今後は、我が身に人生の「無常」の風が吹くことを予想し、万一の場合の措置を読者の皆様に御了解いただいております。書き手に不慮のことが起きた場合は、執筆を中断せざるを得ず、いただいた郵送料の義務を果たす事が出来なくなります。そうした非常の際を想定して今後は『ごあいさつの遺書』をしたため最終号に掲載の準備をしておきます。

また、その際、こうして前の年にまとめていただいた郵送料や残りの切手はこの世の旅出のはなむけとしてありがたく頂戴いたしますのであしからず前もってお許しを乞いたいと存じます。今年からは筆者の心中の覚悟とお願いをご了承の上、更新の手続きをお願い申し上げます。

『編集事務局連絡先』 (代表) 三浦清一郎 住所 〒811-4145 福岡県宗像市陵巖寺2丁目15-16
TEL/FAX 0940-33-5416 E-mail sdmiura@fj8.so-net.ne.jp

『風の便りの購読について』 購読料は無料です。ただし、郵送料の御負担をお願いしております。2005年分の11月号、12月号の2か月分を新規にご希望の方は、『編集事務局連絡先』まで、90円切手2枚、または、現金180円をお送りください。また、新規にお申し込みの方で、2006年からもご継続を希望の方は、90円切手12枚、または1080円と併せてお送りください。

尚、誠に恐縮ですが、インターネット上にお寄せいただいたご感想、ご意見にはご返事を差し上げませんので御寛容にお許し下さい。『オンライン「風の便り」

<http://www.anotherway.jp/tayori/>